埼玉学園大学・川口短期大学　機関リポジトリ

Research on Interpersonal Communication of Childcare Wokers to Improve the Quality Early Childhood Education and Care

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2022-02-18 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 堀田, 正央, 齋藤, めい, SAITO, Mei メールアドレス: 所属:
URL	https://saigaku.repo.nii.ac.jp/records/1430

This work is licensed under a Creative Commons Attribution-NonCommercial-ShareAlike 3.0 International License.

保育の質的向上に向けた保育者の対人コミュニケーションに関する研究

Research on Interpersonal Communication of Childcare Wokers to Improve the Quality Early Childhood Education and Care

堀　田　正　央・齋　藤　め　い
HOTTA, Masanaka　SAITO, Mei

Ⅰはじめに

保育所の利用率は年々高まりを見せ、令和２年には１、２歳児の利用率は50.4％となり、初めて過半数を示した。一方で待機児童数は12,329人に上り、経年的に減少傾向にあるものの、保育所定員が平成31年から令和２年の間に2.7％増加していることと併せると、保育ニーズは変わらずに高く、保育の量的拡充し需給バランスを整えることは引き続いた課題であると言える。保育所の量的拡充や利用する子どもの年齢割合の変化は保育の質の確保にも影響を与え、平成30年に改定された保育所保育指針においては乳児保育についての記載が増加しながら、保育所保育を幼児教育として明確に位置付けた[1)]。また幼稚園教育要領、幼保連携型認定こども園教育保育要領と共通して「幼児期の終わりまでに育って欲しい姿」を持ち、子どもの非認知能力養成等が求められることとなっている[2)・3)]。しかしながら保育の質的確保にむけて厚生労働省の提唱する保育の多層的システムモデル（**図１**）を機能させるためには保育者個々人の専門性の向上が急務であるが、地域給付型保育施設における認可条件等が施設給付型の保育施設に比べて国家資格取得者の割合が低く設定されていることや、保育士の離職率の高さ等の問題から、量的な拡充と質的向上を両立させることは困難が伴うことが考えられる。

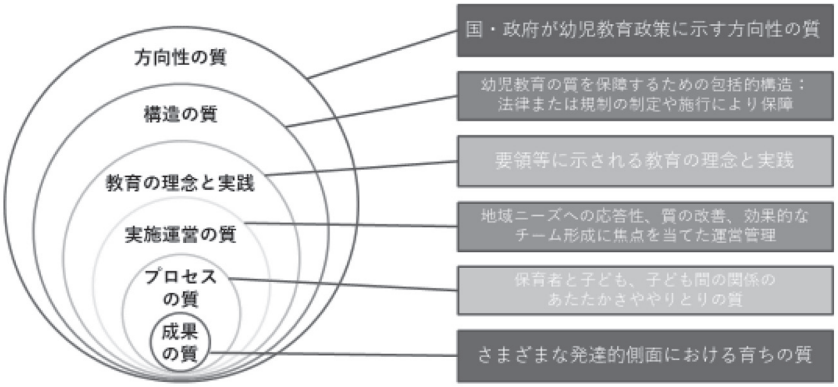
この様な背景の中、保育士の離職理由は多くの調査において「人間関係」が上位に上げられている[4)・5)]。保育所内での虐待事例等への社会的関心の高まりから、令和２年には子ども･子育て支援推進調査研究事業として「不適切保育の対応について」が取り上げられた[6)]。本研究では、保育所等における保育者同士および保育者と子ども／実習生のコミュニケーションのあり方を検討し、同僚性の確保や不適切保育の防止への一助とすることを目的とする。

Ⅱ方法

１）調査対象と期間

2020年７月から2021年９月、指定保育士養

キーワード：対人コミュニケーション、同僚性、Dominantな態度
Key words ：interrersonal communication, colleagueness, dominant attitude



OECD（2006）Starting Strong II

図１　保育の多元的システムモデル

不適切な保育の行為類型：

不適切な保育の具体的な行為類型としては、例えば、次のようなものが考えられる。

① 子ども一人一人の人格を尊重しない関わり
② 物事を強要するような関わり・脅迫的な言葉がけ
③ 罰を与える・乱暴な関わり
④ 子ども一人一人の育ちや家庭環境への配慮に欠ける関わり
⑤ 差別的な関わり

令和２年度子ども・子育て支援推進調査研究事業「不適切保育に関する対応について」事業報告書

図２　不適切保育の類型

成施設である首都圏４年制大学において、保育士養成課程あるいは教職課程（幼稚園）に登録し、実習経験を持った155名に対し集合式質問紙調査を行った。

２）分析方法

基本的な属性等、実習時の人間関係に関するストレスの有無とその内容について単純集計の他、保育者同士のコミュニケーションにおいて気になる場面の有無、保育者の子どもに対する強い（Dominantな）態度の有無について、クロス集計した上でχ二乗検定を行った。また各項目の具体的な内容の自由記述について内容分析を行った。また保育者の子どもに対する強い（Dominantな）態度の適切性、保育者同士のコミュニケーションにおいて気になる場面の子どもへの影響について単純集計を行った。

Ⅲ結果

１）基本属性

対象となった155名の内、男性は38名（24.4％）、女性は117名（75.6％）であった。実習経験について、保育所実習経験者は148名（94.8％）、教育実習（幼稚園）経験者は135名（86.5％）であり、全ての対象が双方

あるいはいずれかの実習を経験していた。

2）実習時の人間関係に関するストレス

実習時のストレスについて、146名（91.7%）が何等かのストレスがあったと回答した。自由記述で得た具体的なストレッサーを分類した結果、ストレス有りと答えた群の中で人間関係に関する内容について最も高い割合を示したのは「理不尽と感じた叱責」の17名（11.6%）であり、次いで「保育者への気遣い」の13名（8.9%）、「保育者による指導の食い違い」の11名（7.5%）、「保護者対応における緊張」の３名（2.1%）となった。人間関係以外のストレッサーについて複数のケースが回答した内容は「実習記録の作成」が102名（69.9%）、「睡眠不足」が33名（22.6%）、「責任実習・部分実習」が18名（12.3%）、「生活との両立」が16名（10.9%）、「体調不良」が４名（2.7%）となっていた。単一のケースが回答したストレッサーは「保育者の子どもに対する態度」、「給食の量」、「スーツでの通勤」、「通勤距離」、「園長の視察」があった。

3）保育者が子どもに対する強い（Dominantな）態度を取る場面と保育者同士のコミュニケーションにおいて気になる場面（表１－３）

保育者が子どもに対する強い（Dominantな）態度を取る場面が見られたのは46ケース（29.7%）、保育者同士のコミュニケーションにおいて気になる場面が見られたのは51ケース（32.7%）であった。同一のケースで両方の場面が見られたのは27ケース（17.3%）であり、各場面の有無のクロス集計によるχ二乗検定の結果、有意に子どもに強い態度を取るケースがより保育士同士のコミュニケーションにおいても気になる場面が見られる結果となった。（$p = 0.000025$）

自由記述として回答された保育者が子どもに対する強い（Dominantな）態度を取る場面の具体例としては、「言葉による叱責」に関するものが最も多く（13例）、次いで「子どもの隔離」（８例）、「気になる身体的接触」（６例）および「行動の強制」（６例）、「保育者の振る舞い」（２例）となっていた。

表１　保育者が子どもに対する強い（Dominantな）態度の具体例（自由記述）

カテゴリ	内容	例数
気になる身体的接触	腕を引いて移動させる	5
	足を引いて移動させる	1
子どもの隔離	集団から離して廊下に移動させる	3
	別室に移動させる	4
	押し入れに閉じ込める	1
言葉による叱責等	大きな声を出す	8
	強い言葉で泣かせる	2
	発達の状況をけなす	2
	製作物等をけなす	1
行動の強制	無理矢理に午睡させる	3
	集団遊びを強制する	2
	トイレを強制する	1
保育士の振る舞い	片づけたものを再度散らかす	1
	製作物等を壊す	1

表２　保育者同士の気になるコミュニケーションの具体例（自由記述）

カテゴリ	内容	例数
同僚や上司への言動	子どもの前で強い口調で話す	4
	直接非難する	2
	陰口や噂話をする	12
後輩や部下への言動	直接非難する	4
	陰口や噂話をする	8
	保育を過度に否定する	2
保護者への言動	保護者に愚痴を言う	1
保育士の振る舞い	物を投げて渡す	1
	書類を隠す	1
	ミスを押し付ける	1

表３　保育者が子どもに対する強い（Dominantな）態度を取る場面と保育者同士のコミュニケーションにおいて気になる場面（N＝155）

子どもに対する強い関わり	保育者同士の気になる場面				合計	
	あり		なし			
	n	%	n	%	n	%
あり	27	17.4	19	12.3	46	29.7
なし	24	15.5	85	54.8	109	70.3
合計	51	32.9	104	67.1	155	100

$p = 0.000025$

保育者同士の気になるコミュニケーション場面の具体例としては、「同僚や上司への言動」に関するものが最も多く（18例）、次いで「後輩や部下への言動」（14例）、「保育者の振る舞い」（２例）、「保護者への言動」（１例）となっていた。

４）保育者が子どもに対する強い（Dominantな）態度についての不適切性（図３）

保育者が子どもに対する強い（Dominantな）態度を取っていたのは46ケース（29.7%）の内、その態度が不適切であると評価したのは７名（15.6%）、やや不適切であると評価したのは13名（28.9%）、概ね適切であると評価したのは10名（22.2%）、適切であると評価したのは15名（33.3%）であり、20名（44.4%）が適切性を疑問視していた結果となった。

５）保育者同士の気になるコミュニケーションが子どもへ与える影響（図４）

保育者同士が気になるコミュニケーションを取っていた51ケース（32.7%）の内、子どもに影響があるとしたのは20名（37.7%）、やや影響があるとしたのは22名（41.5%）、あまり影響がないとしたのは９名（17%）、影響がないとしたのは２名（3.8%）であり、42名（79.2%）が何等かの形で影響があると感じていた。

Ⅳ考察

１）実習時の人間関係に関するストレス

146名（91.7%）が何等かのストレスを実習時に抱えていたものの、人間関係に関する

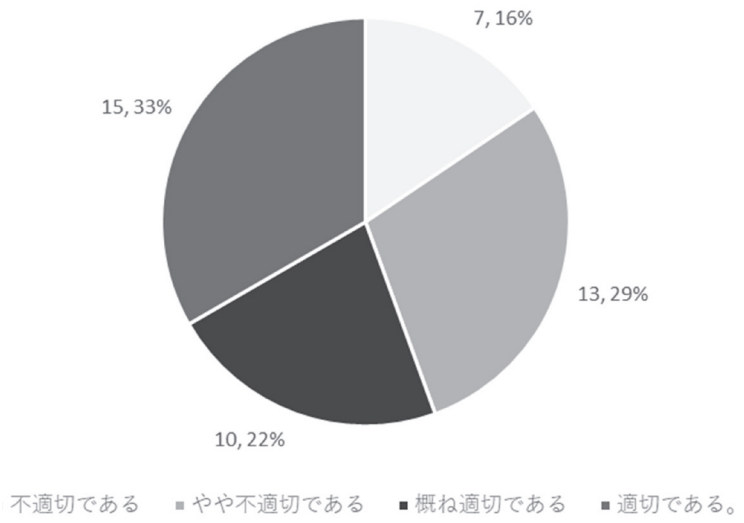


図３　子どもへの強い（Dominantな）対応の適切性（N＝46）

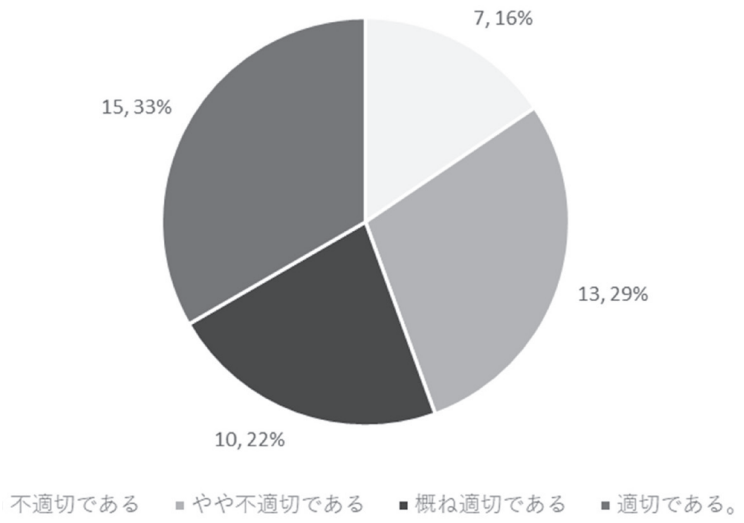


図４　保護者同士の気になるコミュニケーションが子どもへ与える影響（N＝51）

ストレスについては最も多かったストレッサーである「理不尽な叱責」についても17名（11.6%）に留まり、「実習記録の作成」が102名（69.9%）であったことと比較すると相対的は高い割合とは考えにくい。一方でストレッサーに対する感度は個人間で異なることや、そもそも実習生が指導を受ける立場であるという実習の構造を考えると、人間関係に関するストレスの割合の低さが必ずしも実習生が良好な人的関係の中で活動をしていることを保証しているとは言い切れないとも考えられた。

2）保育者が子どもに対する強い（Dominantな）態度を取る場面と保育者同士のコミュニケーションにおいて気になる場面

本調査においては「強い（Dominantな）態度」について具体的客観的な定義を回答者に示しておらず、保育者同士のコミュニケーションにおいても「気になるか」どうかは回答者主観に依拠している問題がある。一方で全ての回答者は実習の前提条件として子どもの発達や保育上の援助・配慮、職域においての同僚性について取り上げる科目を履修済であり、一定の妥当性のある観点を持つことが可能であったと考えられる。

保育者が子どもに対する強い（Dominantな）態度を取る場面については、「強い（Dominantな）態度」が子どもの発達や個性に応じた保育上の配慮の発露であるケースも考えられ、必ずしもその善悪を示唆するものではない。しかしながら実習生は個々のケースについて反省会等で保育の振り返りを行う機会を持っていることや、自由記述において明らかに不適切保育に繋がり得る場面もみられていることからも、子どもの被受容感を始めとした良好な人的環境を構築する上では、一定のリスクであるとも言える。46ケース（29.7％）において保育者が子どもに対する強い（Dominantな）態度を取る場面が見られ、その全てが保育上の配慮に由来するものとは考えにくい。自由記述においても「腕を引く」、「足を引く」、「製作物を壊す」等の回答が見られ、明らかに不適切保育に繋がる要素が見られている。保育室や教室はある空間的人的に程度の密室性を持った場所であり、保育のプロセスが可視化されにくく、評価改善が困難なことも想定される。一定の同僚性を確保しながら、日々の保育者同士のコミュニケーションの中で子どもへの対応に少なくとも自覚的になることや、保育のプロセスを見直す園内研修等の機会を確保することが重要であると考えられた。

保育者同士のコミュニケーションにおいて気になる場面は51ケース（32.7％）で見られた。対同僚や上司、対部下や後輩を問わず、当事者不在の陰口や噂話といった間接的な言動が直接的な言動の２倍以上に上り、ポジティブな目的を持った話題の対象本人への意見や指摘にはなり難いことが示唆される。良好な人間関係に基づくコミュニケーションは保育のプロセスを相互に共有し、評価改善に繋げる上で重要な前提である。陰口や噂話をする保育者個人の人格や資質を問題とするのではなく、意見や不満を公然と示し不適切な言動等を職員が相互に抑制する職場文化の醸成が必要であると考えられた。

保育者が子どもに対する強い（Dominantな）態度を取る場面と保育者同士のコミュニケーションにおいて気になる場面のクロス集計においては、保育者同士のコミュニケーションが気になる場面があったケースにおいて有意に子どもへの強い（Dominantな）態度を取る場面が多く見られた。このことからも職域としての保育所／幼稚園の個別の文化や同僚性のあり方が、表象的な言動や行動に繋がっていることが示唆された。

3）保育者が子どもに対する強い（Dominantな）態度についての不適切性

20名（44.4％）が保育者の子どもに対する強い（Dominantな）態度について適切性を疑問視していた。実習生の適切性に対する観点の妥当性や、保育者との関係性におけるバイアスがあるにせよ、第三者からの不適切性

の評価は少なくとも省察のための材料として有効に活用できる可能性がある。子どもに対する強い（Dominantな）態度ついて、その意図や配慮を事後に確認したかどうかは今回の調査ではデータとして得られていないが、実習生等からの疑問や指摘から保育のプロセスを見直すこともある得ることが考えられる。特に保育実習においては全国保育士養成協議会が策定したミニマム・スタンダード等があるのみで内容を明確に規定した法令が存在しないが、園内での日常的なコミュニケーションや研修以外にも実習等を通じた養成校との連携において保育のプロセスを共有／改善することの有効性も示唆された。

5）保育者同士の気になるコミュニケーションが子どもへ与える影響

保育者同士の気になるコミュニケーションについては、79.2％が何等かの形で子どもへ影響があると回答した。今回の調査では保育者同士のコミュニケーションにおいて子どもについての話題は自由記述の中で上げられていないが、保育者の言動や振る舞いが間接的にせよ保育の質に影響を与えることが危惧される。保育者同士のコミュニケーションのあり方は、カリキュラム等の保育の構造にせよ、子どもとの関わり等における保育のプロセスにせよ、全てのシステムレベルに影響を与えることが考えられ、気になるコミュニケーションの原因を除去するだけではなく、保育の質的向上に繋がる良好なコミュニケーションのあり方について、今後さらなる検討が望まれる。

Ⅴ結論

保育の量的な拡充に伴う施設規模、保育対象、設置基準の多様化は、必ずしも保育の質的な向上と相反するものではない。一方で今回の回答者が実習を行った最も厳しい基準を持つと考えられる施設給付型の幼児施設における改善点は、より緩和された基準を持つ施設にも共通したものであることが考えられる。不適切な保育を抑制すると同時に保育の質的向上を目指す上で、不適切保育に至らないまでも保育に影響を与えると考えられる子どもや同僚に対するコミュニケーションのあり方は、多くの要因が交絡した表象的状況であるが故に具体的な状況把握や改善が困難な側面を持つ。一方で「幼児期の終わりまでに育って欲しい10の姿」において非認知能力にまつわる協同性、自立心、社会生活との関わり等は対人コミュニケーションの基盤として強い関わりをもつものであり、保育者として子どもの被受容感や職場の同僚性を日々省察し改善していくことは、重要な専門性の一つであると考えられる。

本研究において不適切な保育に繋がる可能性のある子どもに対する強い（Dominantな）態度、保育者同士の気になるコミュニケーションの双方について、約30％のケースで確認される結果となった。現在の保育の質的向上において、園内のシステムレベルでは「構造の質」、「保育のプロセスの質」、「成果の質」の３点が重要であるとされる。どのシステムレベルにおいても保育の特性上ある程度保育者個人の経験や人格に依拠せざるを得ない部分がある。しかしながら子どもに対する強い（Dominantな）態度が見られたケースは、そうではないケースと比べて保育者同士の気になるコミュニケーションも有意に高い割合で確認された。保育者個人の省察にまかせるだけではなく、保育のプロセスについて園愛の



図５　幼児期の終わりまでに育って欲しい10の姿

保育者相互に、あるいは園外の第三者を交えた評価・改善を行っていくことが、今後の保育の質的向上に向けて重要であることが考えられた。

参考文献

1）厚生労働省『保育所保育指針』
2）文部科学省『幼稚園教育要領』
3）内閣府『幼保連携型認定こども園教育・保育要領』
4）厚生労働省『保育人材確保のための魅力ある職場作りに向けて』，2017.
5）厚生労働省職業安定局『保育士資格を有しながら保育士としての就職を希望しない求職者に対する意識調査』，2014.
6）株式会社キャンサースキャン
『不適切な保育の未然防止及び発生時の対応についての手引き』，2021
7）OECD『Starting Strong II』，2006
8）森本美佐『新人保育者の早期離職に関する実態調査』，奈良女子大学紀要（44），101-109，奈良女子大学，2013
9）Katherine M. Zinsser, Craig S, Bailey, Timothy W. Curby, Susanne A. Denham, Hideko H, Bassett『Exploring the predictable classroom: preschool teacher stress, emotional supportiveness, and students social-emotional behavior in private and Head Start classrooms』, NHSA Dialog A Research-to-Practice Journal for the Early Intervention Field 16 (2), 2013
10）大野和男『進路決定における保育実習・教育実習の重要性と実習時のリアリティ・ショック』，鎌倉女子大学紀要（25），35-48，鎌倉女子大学，2018